

高山寺明恵上人七百年遠忌点描

—大久保利武・内藤虎次郎（湖南）・堂本印象—

小林あづみ

キーワード：夢記、遺香庵、東伏見宮大妃周子、国史絵画、日本八景、情報メディア史

はじめに

本稿は1931（昭和6）年11月に京都梅尾の高山寺で営まれた、明恵上人（鎌倉時代の華嚴僧、高山寺中興開祖）の七百年遠忌法要に付随した諸事業の関係者をめぐる資料を紹介するものである。筆者は永らく明恵の記した「夢記」の高山寺外における所蔵情報を扱っており、その成果は公にされたが、残念ながらその後情報を追加する機会を失っている。ここではそのような資料について調べる過程で明らかになったことを一部述べ、明恵上人七百年遠忌事業（以下、遠忌事業）の意味を考察する手がかりとする。ただ、門外漢による調査報告のため、的外れな部分や遺漏が多いことも予めお断りしたい。

なお、資料の引用に際して旧字体は新字体に改め、踊り字は開いた。改行は/で詰めた箇所がある。年次の表記は原則として西暦に（ ）内で元号を示したが、近い年次が続く場合、頻出する昭和5年および6年に関して、また新聞記事については数字の見易さ、検索の便を考慮し元号のみとした。主要な人名は初出時に（ ）内に号、社会的地位を注記し、再出以降は姓あるいは名のみで記した。

1. 明恵上人七百年遠忌と遺香庵

冒頭で述べた資料のひとつは、京都府立京都学・歴史館（旧京都府立総合資料館）所蔵の「会記 明恵上人献茶」である。中に「席 遺香庵/床 明恵上人夢之記/文中に七日夜夢云々/九日夜夢云々とあり」などと記される。現在高山寺には所蔵されていない「夢記」であり、寺外の「夢記」を集成した『明恵上人夢記訳注』^{註1)}の「Ⅲ 目録」（以下「目録」）の体裁に随えば、

第3部 3-17 某年月七日、九日夢記

〔年月日〕七日・九日〔体裁・行数〕掛幅装〔備考〕昭和十一年十一月十一日に高山寺遺香庵にて開催された明恵上人献茶会記に「七日夜夢云々/九日夜夢云々」とあり。

ということになる。この資料にみえる「遺香庵」とは、明恵が榮西より贈られた茶を栽培し日本に茶が広がったという伝承から、昭和6年の明恵上人七百年遠忌の折に、高橋義雄（箒庵、三井呉服店取締役、王子製紙専務などを経て茶人として活躍）が総代となり、益田孝（鈍翁、男爵、三井物産社長等）をはじめとする数寄者たちが高山寺内に寄進した茶室のことである。高橋の記録^{註2)}によれば、寄進の概要は以下のようなものであった。

①寄進者総代：高橋義雄 寄進世話方：土橋嘉兵衛（無声庵、道具商）

②寄進者等：京阪神・東京・名古屋・金沢の数寄者等103名と、大日本茶道協会。加えて有志で遺香庵の常什品を51名より73点寄進。費用と常什品とを寄進した者は、益田夫妻、平井仁兵衛（東庵、呉服商、今日庵老分、高山寺檀信徒総代）、磯野良吉（丹庵、大阪窯業社長等）、富田重助（宗慶、名古屋鉄道社長等）、野崎広太（幻庵、中外商業新報社主、三越百貨店社長等）等16名。

③茶室建設：「後来当山に参詣する幾多の道俗に対して、当山所産の抹茶を供養すべき道場」として建設。木村清兵衛による建築、小川治兵衛による作庭。昭和6年6月より工事開始。天井の棹縁、落掛、炉縁、扁額（益田の揮毫）は高山寺古材。梵鐘：茶恩鐘（高橋鐘声堂製、寄進者名を彫刻）

④茶室披き：昭和6年11月11日

濃茶席受持：高橋義雄

(薄茶席 (於高山寺石水院) 受持：野村徳七 (得庵、野村財閥創始者))

⑤本席飾付等 (高山寺や明恵ゆかりの品のみ記載する)

床：明恵上人自画讃豎幅^{注3)}

「高尾草庵ニコモリキルニアル人ノココロサシトテ花立ヲオクリタモウニ 云々^{注4)} 咲花もすかたもおなしことわりにをりいれてみよ人のこころを」

茶碗 (替)：箒庵好 銘「遺香」

濃茶：梶尾産、銘「遺香」(柳櫻園詰製)

菓子：箒庵好 日の出皿 (鈍阿焼「日出先照高山之寺」^{注5)} 焼出) に日の出餅 (道喜製)

⑥会計：103名より100円ずつ、また大日本茶道協会より100円寄進。収入10,400円、支出5,454円60銭。残金は遺香庵維持基金に充当。

七百年遠忌と遺香庵寄進を契機として、その後も毎年この時期に高山寺開山堂での献茶と遺香庵での茶会が催された。翌1932 (昭和7) 年11月11日には藪内紹智等、昭和8年には千宗室による献茶と平井による献香、昭和9年には千宗左・久田宗也等、昭和10年には堀内家等が担当したことが知られる^{注6)}。冒頭に掲げた資料は遺香庵寄進にかかわった人々が茶室の末永い善用を願った営みが続いていることの証なのである。

高橋の記録によれば、遺香庵の建設は明恵上人奉賛会 (以下、奉賛会) に諮り、修正案を受け入れて進行したが、奉賛会については「明恵上人奉賛会趣意書」 (以下「趣意書」) 等によれば下記のような組織であった。

①会長：大久保利武 (侯爵、貴族院議員)、副会長：土岐嘉平 (京都市長)、顧問：村山龍平 (香雪、玄庵、大阪朝日新聞社主)、本山彦一 (松蔭、大阪毎日新聞社主) 等、評議員：茶道各派宗匠等

②目的：高山寺における七百回忌法要の賛助、高山寺蔵宝物典籍の保存、諸堂舎の修繕

③会員：寄付額により名誉会員から賛助会員の6種に分かれる。

明治の廃仏毀釈以降、多くの寺院が経済基盤を失い存続の危機を迎えたが、その後明治天皇の行幸、前アメリカ大統領グラントをはじめとする海外要人の来日等を契機として古社寺保存の必要性が説かれ、1900年前後の

ナショナリズムの高揚から特にその機運が高まった^{注7)}。こういった時代背景の中で営まれた遠忌事業の持つ意味を考える一助として、以下に三名の人物を採りあげたい。

2. 大久保利武

高橋によれば大久保は

①大久保家の主君筋にあたる島津公爵家の始祖 (忠久) と明恵上人の縁

②大久保自身が明恵上人の崇拜者

という立場より、遠忌事業にかかわっている。①については、1897 (明治31) 年、高山寺の什宝の一つ、島津忠久の肖像を松方正義・雨森菊太郎が仲介し、島津久光が模写させた島津家所蔵の写本と交換譲渡したという一件があった^{注8)}。「趣意書」にはこの肖像画について、忠久が幼時明恵上人の許にあり、後に薩摩に下る折に藤原信実 に肖像を描かせ、「遺愚影守北闕」と題し皇室への忠誠を誓って高山寺に奉納したものであり、1861 (文久2) 年島津久光が上洛の折、近衛忠熙邸にて拝し、勤王の志を強めた一因となったもので、明治維新にも多大の影響関係を有するものと記される。

ただ、大久保が奉賛会の会長職を務めるには、①②の他にも強い理由があるように思われる。従って以下にまず、大久保の略歴を挙げる。

1866 (慶應2) 年	鹿児島市に誕生。大久保利通の三男
1887 (明治20) 年	第一高等中学校卒業、エール大学ロースクール入学
1889年	同校卒業
1890年	ハレ大学入学
1894年	ハレ大学より博士号 (邦題「日本地方行政并自治法沿革」)、帰国
1895年	台湾総督府
1896年	内務省転任。内務大臣秘書官
1900年	鳥取県知事。以後大分、埼玉県知事を歴任
1909年	農商務省商務局長
1912 (大正元) 年	大阪府知事
1917年	退官。貴族院勅選議員
1927 (昭和2) 年	岩倉公田蹟保存会会長。『大久保利通日記』刊行
1928年	長兄利和隠居のため襲爵、貴族院侯爵議員
1930年	【明恵上人奉賛会会長】

1931年 日独文化協会会長、【明恵上人七百年遠忌】
1938年 日独協会会長
1943年 永眠

このほかに大久保は、日本赤十字社、中央社会事業協会等の社会福祉事業に関係し、博物館事業促進会の評議員、京都観光協会会長等の職にもあった。以上の経歴から明恵上人奉賛会へとつながるものとして、大阪府知事と岩倉公旧蹟保存会会長の2点に注目したい。

大阪府知事時代、大久保は大阪府立図書館（1904（明治37）年、住友吉左衛門（春翠、住友家15代当主）によって建築・寄附を受けた）の初代館長となった今井貫一を中心とする大阪史談会とのかかわりを持ち、大阪府下の皇室関係の事跡を調査研究することを推し進めた。今井は史蹟調査会を1915（大正4）年に発足、史蹟保存のみならず展示会や講演会を府内各地で開催、愛郷心・愛国心を涵養する国民教育を行った^{注9)}。「趣意書」には皇室と高山寺の関係が、勅額下賜のほか以下のように記されるが、大久保にとって皇室とかかわりを持つ地の顕彰事業は、高山寺以前に何度も手掛けた事業であった。

上人幽境に隠棲すと雖も、而も勤王の志至て篤く承久の役官軍敗るや 後鳥羽上皇一時当高山寺に御幸し給へりと伝へらるるのみならず敵将北条泰時は却って上人に感化せられ爾来稀有の善政を行ふに至れり。

府知事を退官後も大久保は、岩倉具視の旧蹟保存に関わり、その会長職を務め顕彰活動に携わった。七百年遠忌の翌年5月、岩倉公五十年祭が京都で挙行されている^{注10)}が、両者は以下のような類似点を持つ。

- ①皇室への功績のあった人物を称え、そのゆかりの建造物・文書を保存
- ②法要・祭典の挙行
- ③②の時期にあわせ、その人物に関係した品々を展示する展覧会を恩賜京都博物館にて開催（「高山寺名宝展観」/「岩倉公展覧会」）
- ④宮内省よりの下賜金と一般よりの寄付金によって事業を推進^{注11)}
- ⑤人的構成（大久保のほか東伏見宮大妃周子、平井、土岐等が関与、次項3の内藤湖南は大久保奏上の祭文を起稿）
- ⑥記念出版^{注12)}

⑦建碑や史蹟指定（明恵紀州遺跡の史蹟指定（昭和6年）/岩倉具視隠匿地に建碑（昭和7年））

多かれ少なかれ、当時の顕彰事業は上記のような特徴を有するが、特に⑤に挙げた東伏見宮大妃周子（以下、東伏見宮妃）の関与については以下のようなことが知られる。

上記③の「高山寺名宝展観」を観覧^{注13)}。その翌年の岩倉公五十年祭の前日にあたる5月19日には、大久保の案内で高山寺を訪れた（写真1・2）が、午前10時より午後2時30分に到る滞在であり、その後の「岩倉公展覧会」での滞在（写真3、午後3時16分以降）よりも長い時間を高山寺で過ごした。高山寺では昼食のほか、遺香庵で平井夫人より献茶があった。東伏見宮妃の京都滞在中（5月13日より21日まで）に岩倉公関係行事以外への訪問は、高山寺のみが関係者によって記録されたことに、その意味の大きさがうかがえる。



写真1 「東伏見宮殿下高山寺」
（国立歴史民俗博物館蔵）



写真2 「高山寺遺芳庵御成」
（国立歴史民俗博物館蔵、『岩倉公五十年祭記要』に
「高山寺茶室（遺芳庵）御成」と掲載）



写真3 「博物館遺墨展覧会」
(国立歴史民俗博物館蔵、『岩倉公五十年祭記要』に
「東伏見宮大妃殿下岩倉公展覧会(恩賜京都博物館)
陳列品台覧」と掲載)



写真4 「牧原行幸記念堂前」
(国立歴史民俗博物館蔵、『茶業界』27—8
昭和7年8月に掲載)
前列左より中村円一郎(静岡県茶業組合連合会議所会頭)、
大久保、蜂須賀正韶(侯爵)、田中広太郎(静岡県知事)

東伏見宮妃は岩倉具定(岩倉具視の次男、公爵、貴族院議員、枢密顧問官、宮内大臣等)の長女であり、妹である季子は島津忠弘に嫁いでいる。皇室による海外からの賓客のもてなしのため、しばしば宮中に招かれたほか、愛国婦人会総裁などを務め積極的に各地の行事に臨席した^{注14)} 東伏見宮妃は、1934年(昭和9)年2月に宮中で催された皇太子命名祝賀の饗宴で、昭和天皇の左隣に席が設けられる^{注15)} など昭和天皇からの信任が篤かったことでも知られる存在であった。祖父である岩倉具視の数多くの業績の中でも、1881(明治14)年に保勝会(近畿地方の名勝、古跡の保存を目的とする団体。のちに単なる保存ではなく利用しながら保護するという理念を持った^{注16)})を立ち上げ^{注17)}、京都の特に古社寺の保存事業を進めたこと、更に1883(明治16)年1月に京都御所の整備に関して具体的な提案を行い^{注18)}、皇室行事(即位、大嘗祭等)の京都での執行を実現させたことは、遠忌事業との関係において注目される。「皇室の由緒深く」とされた^{注19)} 高山寺への東伏見宮妃の訪問は5月だが、そののち同年8月に三尾(＝高尾・榎尾・梅尾)保勝会が発足した背景に、高山寺に長時間滞在した東伏見宮妃と大久保の存在があったと推測される。

遠忌事業は大久保にとって、東伏見宮妃との連携の強化による京都の史蹟保存事業の発展の他に、大阪府知事時代や岩倉公顕彰事業にはみられない茶業界とのかかわりをもたらしている^{注20)}。大久保自身は遣香庵寄進にはかわらなかったが、高山寺の開山堂を修理し、全国茶業組合連合会議所会頭会議を遠忌法要にあわせ京都で開催し^{注21)}、遠忌法要記念のセールを行った^{注22)} 製茶業界

の活発な動きは、遠忌事業関係者に強い印象を与えたことは容易に想像できる。翌年に大久保は静岡の茶業を視察しているが(写真4)それは地方行政・自治の歴史で学位を取得し、現場にかかわった大久保にとって、新しい視点をもたらすものではなかっただろうか。

3. 内藤虎次郎(湖南)

「今年は醍醐の法要に引きつづき高山寺その他いろいろの要件査至状態にてとても花どころの沙汰に無之」^{注23)}

奉賛会発起人のひとり、内藤湖南の発言である。奉賛会の成立と事業進行に関してまとまった量と内容を残す高橋の記録では、昭和5年11月初旬に大久保が高橋に「先頃京都に滞在中同地の有志者より明年明恵上人七百年遠忌事業に関して相談を受けたが(中略)近々入洛の序あらば一度高山寺を訪はれん事を勧誘」と発言したのが初見だが、内藤に関する資料には、この書簡のようにそれ以前から遠忌事業に関していくつかの動きがあったことが知られる。では、内藤の遠忌事業への関与はどのようなものだったのだろうか。

まず、内藤の略歴を以下に挙げる。

1866(慶応2)年	秋田県鹿角市に誕生。祖父・父は儒者
1883(明治16)年	秋田師範学校中等部入学、飛び級で高等部に編入し卒業
1887年	卒業後着任した北秋田郡の小学校校長相当職を退職、言論界へ 万朝報、台湾日報、大阪朝日新聞

	等で筆を執る
1907年	京都帝国大学にて東洋史学を担当
1926（大正15）年	退官。帝国学士院会員
1930（昭和5）年	【明恵上人奉賛会設立会で講演】
1931年	御講書始で『通典』を進講、【明恵上人七百年遠忌】
1934年	永眠

この他に内藤は国宝保存会委員、朝鮮史編纂会顧問、日満文化協会理事等を務めていたことが知られる。

前述の書簡から数か月後の11月、京都円山の左阿彌における奉賛会設立会で内藤は講演を行ったが、その内容は以下のように記録されている。

内藤湖南博士は上人の学徳を讃えたる後梅尾宝什の絶群を述べられ、絵画においては鳥羽僧正筆鳥獣戯画、將軍塚絵巻、華嚴縁起等を数へても美術史上燦たるものであり、冥報記玉篇篆隸万象名義等数万の珍籍を襲蔵し、未だ国宝にならざるもので国宝に類すべきもの、亦枚挙に遑がないほどである。実に是等を完全に納めるべき宝庫の新しく設立を見ることは是非奉賛会に依って着工すべき必要がある事で学界の上から観たる梅尾什宝の高貴を諄々として述べられた^{注24)}。

この文章に依れば、内藤の狙いはあくまでも学問上の明恵の意義と、高山寺所蔵品の学術的価値を会員に伝えることであり、奉賛会長を務めた大久保とは若干立場を異にするものであった。このような内藤の立場は、以下に引用する高木利太（列石、大阪毎日新聞専務）の記した奉賛会会員に対する行動にもあらわれている。

内藤湖南・新村出・今井貫一その他同好の諸君と、昭和五年九月廿九日高山寺に訪書行をした。嘗て学者の採訪に触れなかった書櫃が、湖南博士指導の下に開かれた^{注25)}。

内藤は高山寺聖教目録にある一切経二部のうちの「唐本」と記される經典は、現在高山寺では宋板と称され、湖州の思溪板と朝鮮の義天板という二種の「珍籍」が混淆して納められたものであることなど、数々の典籍に関して解説を加え、「この沢山の物を整理するには、少なくとも一ヶ月はかかるので、得心の行くまでに細かく観ることは出来なかったが、国宝とすべきものがどれだけ多くあるかは見当もつかぬ」と語っている。ここから、

この項冒頭の書簡で述べられた内藤の多忙は、奉賛会会員を伴った訪書や典籍整理に関するものであったことがわかる。また、上記引用部分末尾の国宝に関するコメントは、奉賛会設立の折の講演でも繰り返され、高山寺所蔵典籍の重要性とその保存状態への理解を強く求めていることもうかがえる。この時、高木と共に高山寺に同行したのは、谷村一太郎（秋邨、藤本B B銀行会長）、上野精一（青逸、竹山、大阪朝日新聞取締役会長）、武田長兵衛（武田長兵衛商店（後の武田薬品工業株式会社）設立）等の関西の古美術・古典籍のコレクターたちであったが、内藤に対する「今日京阪の名だたる蒐集にして先生の息のかかっていないものはないといつてよいくらいである。^{注26)}」という評からも、内藤の高山寺所蔵典籍に関する発言は遠忌事業にかかわった、特に関西のコレクターたちへ強い影響力を持ったことがうかがえる。

なお、内藤は大阪朝日新聞記者時代、瀧精一（拙庵、東京帝国大学教授（美術史）、当時の文化政策の中心的人物）の叔父にあたる高橋清三（『國華』創始者）の私設秘書を務め、瀧とは旧知の間柄であったことや、京都府における史蹟名勝地調査会の発足に、黒板勝美（虚心、東京帝国大学教授（日本史）、瀧同様に文化財について指導的な立場にあった）とともに、中心的にかかわった^{注27)} ことなどからも、京都における史蹟保存に関する主導的人物として遠忌事業に関与したことが理解できる。

内藤はまた劉世珩（葱石、清末の財務官僚。辛亥革命後は官を辞し、古典籍の校刊等を行う蔵書家、綿糸工場設立等に関わった人物として知られた。三江師範学堂（後の南京大学）の総長相当職を務めたことには議論がある。）の来日時に恩賜京都博物館を案内したところ、劉は展示品の他に8点の典籍の閲覧を求めたが、そのうちの4点は高山寺の寄託本であったということがあった^{注28)}。高山寺の典籍群の高い価値を海外の知識層も熟知していたのである。奉賛会設立の折、内藤が金堂や開山堂よりも高山寺の典籍を収蔵する「宝庫」の必要性を説いたのは、以上のような経験からでもあった。

なお前項⑥の出版事業の中の一冊、村上素道『梅尾山高山寺明恵上人』は、内藤の揮毫による題箋と扉を有するものである。内藤の遠忌事業への関与は、少なくとも遠忌法要の2年前からであった。

このように奉賛会発足以前から活動を展開した内藤もまた、大久保と同様に遺香庵寄進にはかかわっていない。内藤の次男である内藤耕次郎の以下のコメントにその理由が示されている。

きらいだったもの。(既述のものは省いたが一部重複)
勘の悪い愚物。大衆に迎合する進歩的文化人。聖人を信
仰する愚直な道学者。せんさいな日本画。岐阜提灯、わ
び、さび、茶の湯、民芸^{注29)}。

4. 堂本印象

遠忌事業は広く一般社会にも影響を与えたことが、読
み物や絵画作品に明恵を主題にしたものがこの時期見受
けられるようになることからうかがえる^{注30)}。ここでは遺
香庵寄進者のうち唯一の画家であり、七百年遠忌前年に
明恵関係の作品を2点(図5、図6)制作している堂本印象
を採りあげる。印象はきわめて多作、多方面での制作で
知られるが、以下にまず、遠忌事業を中心とした略歴を
挙げる。

1891 (明治24) 年	京都市の酒造家の三男として誕生。本名三之助
1910年	京都市立美術学校卒業、西陣の龍村平蔵の工房にて図案を担当
1918 (大正7) 年	京都市立絵画専門学校入学
1921年	同校卒業、同校研究科進学
1924年	同校研究科修了。第5回帝展委員
1925年	第6回帝展に「華厳」を出品、帝国美術院賞受賞 大徳寺龍翔寺襖絵制作
1927 (昭和2) あるいは	「別府風景」
1928年	
1928年	「京洛八景」
1930 年	京都市立美術工芸学校教諭に着任 大分県富貴寺本堂壁画模写 「榎尾明恵上人旧跡」(「洛中洛外十二景勝」12点のうち) 「明恵上人」(「京洛名紳帖」10点のうち)
1931年	第12回帝展に「大原談義」を出品 仁和寺黒書院襖絵制作 知恩院の依頼で「法然上人像」(国宝、藤原隆信筆)を模写 高野山根本大塔壁画、柱絵の制作 依頼あり 【明恵上人七百年遠忌】 【遺香庵寄進】
1934年	教王護国寺小子房襖絵、聖徳記念 絵画館壁画「侍講進講」制作

1936年	東丘社創立、後進の指導を開始 京都市立絵画専門学校教授 高野山根本大塔壁画、柱絵制作 (～1942年)
1950年	日本芸術院会員
1953年	東丘社第10回記念展に「メトロ」 を出品、現実生活に依拠した洋画 的表現を試みる
1956年	第12回日展に「意識」を出品、初 の抽象画
1961年	文化勲章受章、文化功労者
1966年	堂本印象美術館開館
1969年	日展改組、顧問。法然院望西閣襖 絵制作 (～1971年)
1970年	第27回東丘社展に「法然上人一枚 起請文」を出品
1975年	第32回東丘社展に「善導大師」を 出品。永眠

次に印象が制作した、明恵関係の作品を含む連作の、
他のタイトルを挙げる。その上で、①と②に重複する人
物は右肩に＊をつけ、略称は〔 〕内に姓名を記した。

①「洛中洛外十二景勝」＜ ＞内は作品面にタイトル等
が記されていないもの。

- ・＜松尾芭蕉金福寺＞＊
- ・詩仙堂＜石川丈山＞＊
- ・藤村庸軒静居
- ・大雅堂真葛画屋＊〔池大雅〕
- ・太虚庵光悦＊〔本阿弥光悦〕
- ・木米偶居〔青木木米〕
- ・木下長嘯子
- ・荷田東丸
- ・深草草庵元政上人
- ・良雄山科幽居〔大石良雄(内蔵助)〕
- ・＜松花堂洛南居＞＊〔松花堂昭乗〕

②「京洛名紳帖」

- ・頼山陽先生
- ・謝蕪村翁〔与謝蕪村〕
- ・松花堂昭乗＊
- ・本阿弥光悦翁＊
- ・壳茶翁
- ・石川丈山翁＊

- ・一休宗純
- ・松尾芭蕉翁*
- ・池大雅*

管見の限りでは、印象は七百年遠忌の前年にのみ明恵に関する作品を制作しているようであり、また七百年遠忌法要の年に仁和寺の襖絵を制作していることは、遺香庵寄進と関係すると思われる^{注31)}が、他にも何点か興味深い事実を指摘できる。

- ①七百年遠忌にあたる年に、印象は法然に関する作品（「大原談義」、「法然上人像」模写）も制作していること。（明恵は『摧邪輪』で法然が菩提心を重視しないことを厳しく批判したことで知られる）信仰心の深い堂本家の宗派は浄土宗であり、印象の絶筆も「善導大師」であった。印象は以前より『華嚴経』に親しみ、「華嚴」制作時に一種の宗教体験を得ていたことから^{注32)}、明恵に関する関心も深かったと推測される。また各宗派の寺院の荘厳にかかわり、制作上宗派の区別をつけていないように見受けられるが、明恵に関する作品制作は法然のそれのように長期に亘るものではなかった。（略年譜参照）
- ②印象は遺香庵寄進者のうちの一人であり、自身も茶をたしなみ茶道具の制作も行っているが、茶についての随筆^{注33)}では明恵に言及していないこと。奉賛会等が明恵を茶の恩人と称したのとは距離を置いた態度がうかがえる。
- ③印象の明恵関係の作品は、同時代の他の画家による明

恵関係の作品群にはない特徴を有すること。

ここでは③に焦点を当てて印象の明恵観、高山寺観を探り、遠忌事業へのかかわり方について考察する。

この項の冒頭で明恵を主題とした絵画作品の登場についてふれたが、表1はそれを一覧にしたものである。そのうちの一部を図1・2・3で示したが、作品は大きく二



図2 名古屋謙一「楞伽山の明恵上人」
（『日展史9 帝展編四』（社団法人日展
1983（昭和58）年）より転載）



図1 奥村紅稀「明恵上人」
（『日展史8 帝展編三』（社団法人日展
1982（昭和57）年）より転載）



図3 飛田周山「明恵上人と北条泰時」
（神宮徴古館農業館蔵）

表1 明恵上人肖像一覧稿（近代）

画家名	発表年 (複製会場で の展示期間は 省略)	タイトル	明恵のポーズ （「明恵上人樹上座禅像」に倣った作品は(樹)、「明恵上人石上座禅像」(定心石上に坐禅する明恵像)に倣った作品は(石)と表記する)	発表場所	法量等(縦×横、特に断らない限りはcm単位、軸装は本紙の法量)	典拠	備考
吉川霊華	1919 (大正8) 10/24-10/28	縄床樹	(樹) 左斜め後方よりの視点	日本美術学院記念展覧会 (於 京橋高島屋呉服店)		中央美術5-12 1919 (大正8) 年12月、霊華画集続篇(相林社 1935 (昭和10))	鈴木新吉氏蔵(霊華画集続篇)
同上		明恵上人	(樹) 左斜め後方よりの視点。明恵は坐禅せず下駄はきの足を下ろす		紙本、水墨淡彩、132×33	和の美 435号 2008 (平成20)	吉川霊華の年譜類に1925 (大正14) 年に「明恵上人」を制作したとある作品か
安田鞠彦	1919 (大正8) 6/11-12	明恵上人	(樹) 右斜め前方よりの視点	現代名家新作絵画展(東京芸春季会)(於 東京美術倶楽部)	淡彩、尺八絹本	蓬壺帖 1919 (大正8) 年6月	
同上	1930 (昭和5)	明恵上人					安田鞠彦の年譜類にこの年「明恵上人」を制作とあり
同上	1934 (昭和9) 10/25-30	明恵上人	(石) 左斜め前方よりの視点、瓶は向かって左手前におかれる	白荘第33回東西大家新作画展(於 日本橋三越本店6階新館)	尺三絹本	白日 第9年2 1935 (昭和10) 年2月	「着彩の幽麗にして明快なる」(白田編輯者評)
同上	1934 (昭和9) 12/6-8	明恵上人座禅図	画面右上よりさしかかる松樹の枝の下で坐禅。右耳を見せる	報知新聞社主催東北救済新作展(於 日本橋三越本店5階)	2尺5寸、横物	美の国11-1 1935 (昭和10) 年1月	
同上	1937 (昭和12) 12/3-8	明恵上人	梅の枝を右手にしながら向かって右手前の花瓶の前に座す	三味堂第1回新作画展		美の国14-1 1938 (昭和13) 年1月、塔影14-2 1938 (昭和13) 年2月	「片ほかしのデクニツクを法衣に使ってゐる」(美の国編輯部評)
同上	1943 (昭和18) 6/9-15	梅尾の聖	(石?)	三越日本画小品展(於 日本橋三越本店)		国画 3-9 1943 (昭和18) 年9月、季刊美術 2-3 1943 (昭和18) 年10月	米見。「岩上座禅の白描の明恵上人」「上方に点描風な杉木立を濃淡量で添へた」(『国画』神崎一郎評)
奥村紅稀	1927 (昭和2)	明恵上人	(樹)	第8回帝展		帝国美術院美術展覧会図録第8回 第1部 1927 (昭和2)	図1
名古屋謙一	1929 (昭和4)	楞伽山の明恵上人	(樹)	第10回帝展		帝国美術院美術展覧会図録第10回 第1部 1929 (昭和4)	図2
堂本印象	1930 (昭和5)	明恵上人	草履履きの立ち姿。右耳を見せる。画面右手に振り向く鹿		紙本着色、27.0×19.0	京都府立堂本印象美術館蔵品目録 1997 (平成9)	図6 「京洛名紳帖」10点のうち。同年に「梅尾明恵上人旧跡」(洛中洛南十二景勝) 12点のうち)を制作
飛田周山	1933 (昭和8)- 1942 (昭和17)	明恵上人と北条泰時	北条泰時に政道を説く。室外には紅葉	国史絵画	181.0×181.0	絵で見る日本の歴史(神宮敬古館農業館 2013 (平成25))	図3
福岡青嵐	1938 (昭和13)	明恵伝	(樹) 頭に被り物をした明恵が右手を挙げる	青龍社展第10回(於 東京府美術館、大阪阪急百貨店)	紙本、長巻4段、2尺8寸×5尺5寸	目録(青龍社展) 1938 (昭和13) 年9月	「京都梅尾山中に明恵上人が徐に禪定より起きたる姿」(目録の出品解説)
同上	1939 (昭和14)	明恵伝(続)降魔の巻	1. 厚絵：右向きで坐禅する明恵。画面右下に酒を勧める男 2. 左向きで座して説法する明恵。周囲に北条泰時らが座す	青龍社展第11回(於 東京府美術館、大阪阪急百貨店)	紙本、4段、2尺8寸×5尺5寸	目録(青龍社展) 1939 (昭和14) 年9月	
同上	1940 (昭和15)	明恵伝(続)成道の巻	如磨島にて右向きで坐禅	青龍社展第12回(於 日本橋三越本店、名古屋市中区公会堂、大阪阪急百貨店)	絹本、三幅対。日観：6尺×2尺、切磨島：4尺×5尺、月観：6尺×2尺	目録(青龍社展) 1940 (昭和15) 年8月	
同上	1941 (昭和16)	明恵伝その四(完)	(樹) 藤の花に囲まれ座す。数珠を持つ右手は膝の上に、左手は膝元におく	青龍社展第13回(於 日本橋三越本店、大阪阪急百貨店、十一屋百貨店)	絹本、三幅対。文殊菩薩：6尺×2尺、宗寂：6尺×4尺、弥勒菩薩：6尺×2尺	目録(青龍社展) 1941 (昭和16) 年8月	「示寂図」(目録の出品解説)
同上	1944 (昭和19)	明恵後伝	1. 菩薩行：守護寺に入山のため向かう薬師丸(明恵の幼名) 2. 捨身：薩埵王子に倣い五三昧ヶ原に臥し狼に身体を与えようと右向きで坐禅	青龍社展第16回(於 日本橋三越本店、大阪高島屋)	紙本、三節、1尺7寸×5尺	目録(青龍社展) 1944 (昭和19) 年8月	



図4 「明恵上人樹上座禅像」
(部分、高山寺蔵)

つの特徴を持つことが分かる。一つは「明恵上人樹上座禅像」(図4以下、「樹上座禅像」)の影響であり(図1・2)、もう一つは北条泰時に政道を説く姿である。(2. 大久保利武の項で引用した「趣意書」を参照)

後者の例として挙げた、飛田周山「明恵上人と北条泰時」(図3)は、1933(昭和8)年の皇太子(継宮明仁親王)誕生の奉祝記念として、「少年少女ノ精神教育ノ特殊機関^{注34)}」として設立された東京府養正館を飾る78点の「国史絵画」のうちの1点である。黒板をはじめとする13名の委員^{注35)}が絵画化すべき歴史上の出来事を決定し、55名の画家によって「国史絵画」は制作された。これらを1916年(大正5)年の迪宮裕仁親王(後の昭和天皇)立太子式祝賀記念として制作、皇太子に奉献された「精華帖」36点^{注36)}に比べると、「天照大神」から「平安京」までの画題と、「教育勅語」から「皇太子殿下御誕生奉祝」までの画題とが「国史絵画」では新たに加えられているのが大きな特徴である。(表2)そして「明恵上人と北条泰時」も新たな画題の一つであった。「国史絵画」の成立を考察した澤田佳三によれば、ここでの「国史」とは、「天皇の歴史であり、それは我々の祖先、そして我々自身そのものの歴史でもあるのだというこの時代特有の歴史観^{注37)}」であるが、明恵が「国史」にふさわしい僧侶として唯一人選ばれているのは、奉賛会が明恵と勤王を結びつけて活動したのと同じ動きであるといえる^{注38)}。

これらに比して、印象の作はかなり異質なものといえる。まず「梅尾明恵上人旧跡」(図5)は、山々に埋もれるような高山寺と松樹の茂る参道を進む人物が高い視点より描かれている。明恵の名をタイトルに記し(「高山寺」ではなく)明恵の存在を強く意識させる作品である。そして、連作12点のうちこの作品のみが題に「旧跡」の語

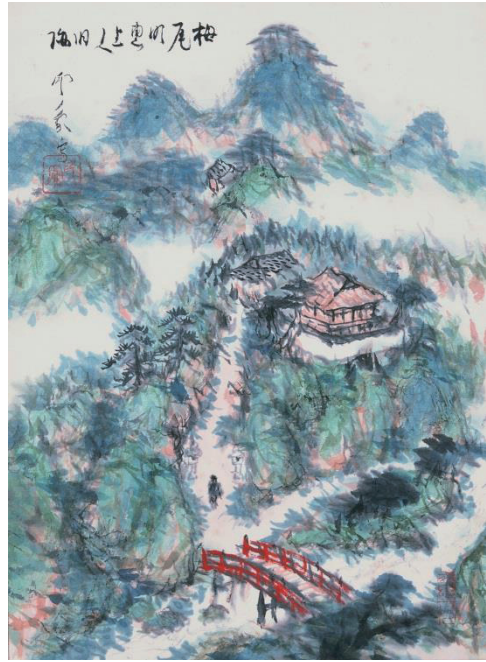


図5 堂本印象「梅尾明恵上人旧跡」(「洛中洛外十二景勝」の内、1930(昭和5)年、京都府立堂本印象美術館蔵)

を含み、旧蹟保存事業である遠忌事業を強く意識して制作されたことが分かる。この作品はまた「明恵上人と北条泰時」のような紅葉が描かれぬが、それは印象にとって梅尾がしばしば賞美された「紅葉の名所」ではなく、「明恵上人」ゆかりの地であるからこそ、保存し未来へと伝える地として価値を見出していたと考えられる。ここに彼の少なくとも当時の高山寺観を見ることが出来るだろう。更に、高山寺の石水院(から観る紅葉や月)ではなく広く山容全体を描いたことに、前項でふれた三尾保勝会へとつながる地域全体を保存する考えを見て取ることも出来る。

加えてこの時期の、日本各地の代表的な景物を選び絵画化するふたつの動きが、十二の景勝地を印象が選び描いたことと連動していたと考えられる。一つは1927(昭和2)年、東京日日新聞と大阪毎日新聞の合同企画で鉄道省が後援した「日本八景」の選定である。「昭和の新時代を代表すべき新日本の勝景^{注39)}」を一般より葉書投票で受け付け、候補地から審査員が「八景」を選定するこの企画は、一ヶ月半弱の投票期間で約9320万枚もの投票があり、「わが国の情報メディア史上、特筆に値する出来事^{注40)}」となった。審査員は、内藤、黒板といった学者のほか、選定された八景を新聞の連載で紹介するために、横山大観や谷崎潤一郎といった著名な画家や作家で構成されていた。東京日日新聞(昭和2年5月30日)で発表された、八景を描く画家のなかに印象の名はみえな

表2 「国史絵画」「精華帖」画題一覧

「国史絵画」番号	「国史絵画」画題	「精華帖」画題	「国史絵画」番号	「国史絵画」画題	「精華帖」画題
1	天照大神	大極殿朝賀	41	山内一豊の妻	豊臣秀吉鳳輦を聚楽第に迎へ奉る
2	天孫降臨		42	豊臣秀吉の勤皇	
3	神武天皇御東征		43	名護屋城の秀吉	
4	神武天皇御即位		44	加藤清正	
5	鳥見山の郊祀		45	日本人の海外発展	
6	皇大神宮奉祀		46	徳川家康	
7	日本武尊		47	徳川光圀	
8	弟橘媛		48	大石良雄	
9	神功皇后		49	竹内式部	徳川家康江戸城を築く
10	仁徳天皇				徳川光圀大日本史を著す
11	聖徳太子				大石良雄等故主の仇を復す
12	中大兄皇子と中臣鎌足	菅原道真幼時の射的 巨勢金岡賢聖障子を描く			新井白石朝鮮の使節に応接す
13	平城京				徳川吉宗の放鷹
14	舎人親王		50	本居宣長	竹内式部の講書
15	和気清麻呂		51	松平定信	上杉治憲能を舞ひて養父を慰む
16	平安京				本居宣長の勉学
17	菅原道真				松平定信海岸を巡視す(この画題は「本居宣長の勉学」の前に記載される)
18	醍醐天皇				島津斉彬の尊王
19	紫式部		52	黒船の来航	憲法発布
20	源義家		53	孝明天皇	
21	平重盛		54	橋本景岳と三条実万	
22	那須与一		55	吉田松陰	
23	源頼朝		56	大政奉還	
24	明恵上人と北条泰時		57	江戸城明渡	
25	松下禅尼と北条時頼		58	五箇条御誓文	
26	元寇		59	東京奠都	
27	神風		60	鉄道開通	
28	護良親王		61	憲法発布	
29	名和長年		62	教育勅語	
30	新田義貞		63	日清戦役	
31	後醍醐天皇京都還幸		64	広島の本営	
32	桜井駅の訣別	元寇殲滅	65	昭憲皇太后傷病兵御慰問	
33	楠木正行の母		66	日露戦役	
34	北畠親房		67	乃木将軍とステッセル	
35	楠木正行		68	奉天入城	
36	楠木正行		69	日本海海戦	
37	菊池武光		70	韓国併合	
38	後奈良天皇		71	明治天皇	
39	上杉謙信		72	南洋出兵	紫宸殿御即位礼奉賀
40	織田信長の勤皇		73	皇太子殿下御外遊	
			74	皇太子殿下御外遊	
			75	皇后陛下の御仁慈	
			76	今上陛下御即位式	
			77	満州事変	
			78	皇太子殿下御誕生奉祝	

注：「国史絵画」の番号・作品名は『絵で見る日本の歴史』（神宮徴古館 農業館 2013（平成25）年）に依拠した。「精華帖」は注36より適切なものを選んだ。

いが、その後発刊された『日本八景』では「別府風景」を印象が描いている^{注41)}。そしてもう一つの動きは「日本八景」選定の翌年に昭和天皇大礼の奉祝記念として『京洛八景』が刊行されたことである。この刊行は「日本八景」選定が影響したものと考えられるが、その画も印象が担当している^{注42)}。「日本八景」について、内藤は伝統的な八景が持つ時間意識が欠如していることを指摘しているが^{注43)}『京洛八景』では四季それぞれに二景ずつを配した（桜の円山公園や清水寺の夏の月、紅葉の山中を歩む大原女、積雪の京都御所など）内容で、時間を意識した選定となっている。ただ、『京洛八景』で描かれた大原女等の人物像は個人の業績をクローズアップしたものはなかった。内藤は「日本八景」について述べた前述の指摘に続けて「必ずしも十和田湖（引用者註：「日本八景」のうちのー）付近とか日向の椎葉あたりの山奥とかまでさがさなくとも」近くに「風致は保存されてゐる」が「最近においていろいろな事情から急速度をもって荒廃につかんとしてゐる」と述べている。恐らく印象は、自分にとって身近な場所である京都で景勝地として選び保存すべき地はどこかを考え、「日本八景」「京洛八景」とは異なる、歴史的人物とリンクした地を選び描いたのではないだろうか。そしてそれは遠忌事業とも深く関連するものであった。

また「京洛名紳帖」の「明恵上人」（図6）は、草履ばきで立つ明恵を鹿が振り向き仰ぎ見る姿が描かれるが、明恵と鹿については、明恵が望んだ渡天竺を春日託宣により断念したのち、春日社に参詣する明恵を30頭ほどの鹿が膝を屈して迎えたエピソードが知られている。明恵を主題にした絵巻である「春日権現験記絵」巻十八や狩野探幽「解脱上人・明恵上人伝絵（探幽縮図）」に描かれる鹿はいずれも伏した鹿であり、冥想せず立った明恵と、立ったままの鹿を描くこの作品もまた、明恵を主題にした絵画群の中では異色のものである^{注44)}。

更に、二種の連作の中で採りあげられた人物は、明恵以外は皆近世の人物であり、芸術面に優れた業績で知られる者が多い。明恵と同様に僧侶である一休もまた花を生ける姿で描かれ、僧侶らしく描かれてはいない。印象はこの時期、人間味豊かな存在を描くことを主題としているため「木華開耶媛」（第10回帝展出品、1929（昭和4）年）を神格化した姿で描かず話題となったこともあった^{注45)}。「明恵上人」においても印象は、過去の明恵像に示される冥想者、あるいは遠忌事業で強調された勤王の僧侶、茶を広めた恩人、貴重な經典類を収集し残した学僧としてではなく、印象自身と同じ芸術家であるという明



図6 堂本印象「明恵上人」（「京洛名紳帖」の内、1930（昭和5）年、京都府立堂本印象美術館蔵）



図7 「明恵上人樹上座禅像」（部分、高山寺蔵）

恵観を示そうとしたのかもしれない^{注46)}。

なお後年になるが「高僧画像に就いて」のなかで印象は「樹上座禅像」（図4）に言及し、「類型的なものではなく」自然景が「切実な親しみのある深い感銘を与える」「うすずみの濃淡と顔に淡彩を施したきわめて簡素な作品」と評価している^{注47)}。図6の「明恵上人」は、薄墨で顔に淡彩を施し、類型的でなく親しみのある簡素な画面である。印象は「樹上座禅像」の評価をこの作品で展開した

とも考えられる。また、この作では鹿が振り向いているが、「樹上座禅像」では明恵の上方で栗鼠あるいは貂かと思われる小動物が振り向いている。(図7) 印象は「樹上座禅像」の小動物を鹿に置き換えたのかもしれない。

いずれにせよ、遠忌事業は印象にとって明恵という人物について、また京都の史蹟保存事業について考え作品へと昇華する機会となったといえよう。描いたのは小品ではあるが、そこにも印象の独創性を見ることが出来る。

おわりに

遠忌事業の関係者のうち、3名を選び資料を紹介しつつそれぞれの立場を探ってきた。いまだ全体が見通せないため断言はできないが、遠忌事業は景勝地や文化財の保存、皇室との関連など、単に高僧を讃え境内を整備・保存するだけではない、時代の影響を受けた事業である事をわずかではあるが指摘した。本文中に挙げた表や資料については、例えば東伏見宮妃の遺香庵での写真は「遺芳庵」とキャプションが付いているため、所蔵先のDBで「遺香庵」では検索できないが、このような見落とされがちな資料を本稿では掲載したつもりである。ただ、今回採りあげた3名が遠忌事業にかかわったことへの直接的な発言を紹介できなかったのは残念である。他の遠忌事業関係者との関係等も含め課題は多い。

また、本稿脱稿後、富岡鉄斎「梅山幽趣図」(1915(大正4)年、清荒神清澄寺蔵)に、梅尾の山容と山を下り橋を渡る明恵像が描かれていることを知った^{注48)}。明恵の姿は高山寺所蔵の「山中の御影」と称される明恵像^{注49)}を模し、画面右上には高山寺所蔵の書状(「高雄上人御房」宛、「鶴禅師」への「授与師範」の件等の内容)が記される。箱書には上人の弟子、恵日房成忍(「樹上座禅像」の作者かとされる)の筆による明恵上人像を写した旨が記される。模写であるため表1には記載しないが、明恵像の受容の広がりを理解するうえでは重要な作と思われる。鉄斎は1883(明治16)年12月より翌年1月に高山寺所蔵の「鳥獸戯画」(丙・丁巻)を模写しており、本作の他にも「明恵上人旧蘆之図」(1901(明治34)年、出光美術館蔵)、「梅山秋葉図」(1885(明治18)～1894(明治27)年、清荒神清澄寺蔵)で秋の梅尾高山寺を描くなど、高山寺を比較的近い存在としてとらえていたと推測される。特に「明恵上人旧蘆之図」は同じく鉄斎の作品「松花堂幽居図」(1895(明治28)～1904(明治37)年、清荒神清澄寺蔵)とあわせ、印象の連作との関係を(当時の南画ブームも含め)考えたほうが良いのかもしれないが、賛の内容の検討など、本稿の範囲を超えるため、ここに

追記するにとどめる。

なお、大久保利武の略年譜作成にあたっては、大久保利泰氏(大久保利武令孫、横浜ゴム(株)勤務ののち、霞会館理事・常務理事を歴任(平成25年退任))より、お電話とメールにてご教示を賜った。ヴェルサイユ条約締結時、渡航のために作成されたパスポート(大正7年12月20日発行)には、慶應2年4月2日と生年月日が記載されること、ドイツ留学中はハイデルベルク大学やベルリン大学でも学び、修得した単位をあわせてハレ大学より博士号を授与されたことなど、貴重なお話をうかがうことが出来た。ここに仲介して下さった霞会館のご高配とあわせ、心より御礼申し上げる。同様に、上野精一の号や事績については公益財団法人仏教美術研究上野記念財団事務局の沖真治氏、朝日新聞社史編修センターより情報を頂いたこと、また、資料を閲覧・掲載するうえで以下の諸機関のご配慮を賜ったことにも深く感謝申し上げます。

京都府立堂本印象美術館、宮内庁宮内公文書館、国立歴史民俗博物館、神宮徴古館農業館、梅尾山高山寺、公益社団法人日展事務局、文化庁、株式会社DNPアートコミュニケーションズ

注

- 1) 奥田勲他編、勉誠出版 2015(平成27)年。なお、同書は「夢記」に関して真贋を問わない形で翻刻や訓読等を掲載しており、本「夢記」が明恵上人自身によるものなのかは、本稿でも不問にする。
- 2) 『遺香庵寄進顛末』1931(昭和6)年。高橋が記した遠忌事業に関する文章を収録したものだが、『昭和茶道記』所収の同タイトルの文章とは若干の異同がある。以下、高橋の記録の引用に関しては同書による。
- 3) 『遺香庵寄進顛末』に写真が掲載される。「目録」4-3-Bの[公刊]に追加すべき内容。
- 4) 「諭事諭理ノココロヲオモキリテ」が略される。
- 5) 高山寺石水院南縁に掲げられた額の文字。額の原字は後鳥羽院の宸翰と伝えられる。
- 6) 大阪朝日新聞京都版 昭和7年11月12日、『茶道月報』(1933(昭和8)年1月)等。
- 7) 西村幸夫「『史蹟』保存の理念的枠組みの成立「歴史的環境」概念の生成史 その4」(『日本建築学会計画系論文報告集』第452号 1993(平成5)年10月)、同『都市保全計画』第1章 東京大学出版会 2004(平成16)

- 年、清水重敦『建築保存概念の生成史』第Ⅱ部第三章 中央公論美術出版 2013（平成25）年等。
- 8) 『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 伊地知季安著作資料集 九』 解題 鹿児島県 2011（平成23）年、読売新聞 明治30年7月8日「雑報」等。
- 9) 住友陽文「史蹟顕彰運動に関する一考察」（『日本史研究』351号 1991（平成3）年11月）、森田俊雄「大阪府の史蹟調査と府立図書館の皇室関係大阪府郷土資料展示（前）」「大阪府の史蹟調査と府立図書館の皇室関係大阪府郷土資料展示（後編）」（『大阪城南女子短期大学研究紀要』43,45号 2009（平成21）年2月、2011（平成23）年2月）
- 10) 以下、岩倉公旧蹟保存会『岩倉公五十年祭記要』1933（昭和8）年による。
- 11) 遠忌事業では、国庫から13500円の補助と宮内省より香華料が下賜された。（大阪朝日新聞京都版 昭和5年11月5日、同昭和6年11月19日）岩倉公旧蹟保存会には宮内省より1000円の下賜金があった。（『財団法人 岩倉公旧蹟保存会要誌』1930（昭和5）年）
- 12) 高山寺：村上素道『梅尾山高山寺明恵上人』1929（昭和4）年、濱田康三郎『梅尾の聖者明恵上人』昭和5年、同『梅尾明恵上人』昭和6年。岩倉公旧蹟保存会：徳富蘇峰『岩倉具視公』昭和7年、『財団法人 岩倉公旧蹟保存会要誌』昭和5年、『岩倉公実記』昭和2年
- 13) 京都日出新聞 昭和6年11月19日
- 14) 大正末期より皇太子（後の昭和天皇）をはじめ皇族が植民地を含む各地の行事に参加し、生身の身体を国民に示すことで国体が視覚化されたが、東伏見宮妃はこういった視覚化に積極的に参与し、献茶もそのひとつとする分析がある。（廣田吉崇「近代における茶の湯家元と天皇との距離—天皇・皇族への献茶にみる家元の社会的地位の向上一」『日本研究』44 2011（平成23）年10月、同『近現代における茶の湯家元の研究』慧文社 2012（平成24）年に再録）
- 15) 書陵部編修課『明治以後皇族実録313 東伏見宮実録44妃周子 昭和7年7月～昭和9年』（宮内庁宮内公文書館所蔵）昭和9年2月23日条
- 16) 中島直人「用語「風致協会」の生成とその伝播に関する研究」（『都市計画論文集』38（3）2003（平成15）年10月）
- 17) 日出新聞 明治27年12月8日
- 18) 「京都皇宮保存ニ関シ意見書」（『岩倉公実記』）
- 19) 注10に同じ
- 20) 農商務省局長時代の発言ではあるが、大久保は日本の農産品の輸出に関して生糸のみを挙げている。（『地主と工業家』『明石講演集』報徳会 1909（明治42）年所収）実際には当時、茶の輸出は生糸に次ぐものであった。
- 21) 京都日日新聞、大阪朝日新聞京都版 昭和6年11月24日。大阪朝日新聞には「組合」字がない。
- 22) 大阪朝日新聞京都版 昭和6年11月14日。
- 23) 内藤湖南より林平造宛書簡、昭和5年4月9日。ただし見出しには4月5日とある。（『内藤湖南全集』第十四巻 筑摩書房 1976（昭和51）年）
- 24) 松阪青溪『梅尾摘翠』昭和6年（非売品）
- 25) 「高山寺の訪書」「附 秋深む梅尾に古典珍籍の興趣 高山寺の玉手箱は訪書行の人に開かる」（宮里立士他編『大阪出版文化資料集 第二巻 高木利太追悼録 附高木利太遺書古活字版展覧目録』ゆまに書房 2012（平成24）年）
- 26) 日比野丈夫「内藤湖南が交わった学者文人たち」（『書論』第13号 1978（昭和53）年11月）
- 27) 黒板より内藤への書簡（齋藤忠『書簡等からみた史学・考古学の先覚』雄山閣出版 1998（平成10）年）
- 28) 「訪古の一日半」（明治36年8月18日・20日 大阪朝日新聞）『目賭書譚』弘文堂 1948（昭和23）年、『内藤湖南全集』第十二巻 筑摩書房 1970（昭和45）年に再録。
- 29) 「人間湖南にかんする断章 その（三）」（『内藤湖南全集』第六巻 月報 筑摩書房 1972（昭和47）年）
- 30) 渡邊黙禪「明恵上人」（『キング』7—5 大日本雄弁会講談社 昭和6年5月）、本稿表1など。
- 31) 当時高山寺は真言宗に属しており、11月の七百年遠忌法要の導師は仁和寺僧たちであった。
- 32) 「「華嚴」製作中の体験」（『美之國』第一巻第七号 1925（大正14）年11月）
- 33) 「茶とそのほか」（『画室の窓』朝日新聞出版社 1954（昭和29）年所収）
- 34) 東京府養正館『東京府養正館創建概要』1941（昭和16）年か。後述澤田論文に引用されているが、所在を確認できない。
- 35) 三上参次（貴族院議員、元東京帝国大学教授）、辻善之助（東京帝国大学教授、史料編纂所所長、著作『明恵上人』あり）、正木直彦（十三松堂、帝国美術院長）、和田栄作（外面、東京美術学校長他）ほか。
- 36) 『美術新報』雑報 16—9、17—7 1917（大正6）年7月、大正7年5月、「献納の歴史画帖」（『美術の日本』10—2 1918（大正7）年2月）等。本稿で採り上げた飛田周山をはじめ鐫木清方、川合玉堂、吉川靈華、小林

古径、下村観山、平福百穂、前田青邨、松岡映丘、安田靫彦、結城素明らの作36点を3帖に装丁したもので正木直彦が統括した。

- 37) 「絵画館と壁画―東京府養正館と国史絵画―」（東京文化財研究所『昭和期美術展覧会の研究 戦前篇』中央公論美術出版 2009（平成21）年 所収）。本稿の「国史絵画」に関する記述はこの論文に依拠するところが多い。
- 38) 「精華帖」にも僧侶は登場しない。
- 39) 東京日日新聞 昭和2年4月9日。
- 40) 新田次郎「情報化する風景―「日本新八景」候補地の選考課程」（『美しき日本―大正昭和の旅 展』東京都江戸東京博物館 2005（平成17）年）。因みに当時の日本の人口は約6400万人である。
- 41) 鉄道省編、大阪毎日新聞社 1928（昭和3）年。松樹の茂る山並みに霧がかかった様子を水墨で描く。なお、「日本八景」として選ばれたのは「別府温泉」で、高浜虚子が担当した紀行文では温泉地の様子が描かれている。
- 42) 京都市編、大札奉祝会 1928（昭和3）年。同年に秋田市からは、平福百穂『秋田名勝画帖』が献上された。（宮内庁三の丸尚蔵館『ひろげる、たのしむ、小粋な日本画―近代画帖の美』宮内庁 2011（平成23）年）
- 43) 「日本風景観」（昭和2年7月13日から19日 大阪毎日新聞）『内藤湖南全集』第九卷 筑摩書房 1969（昭和44）年に再録。
- 44) なおこの作品で明恵は右耳を見せている。明恵の肖像で右耳が描かれる場合は、僧形になるだけでは不十分であり、更に志を高め如来に倣うため耳を切った明恵20歳代のエピソードを示すため右耳の上端が欠けているが、この作品では右耳の輪郭線は通常の描かれ方がされ、頭の剃った部分を墨で彩色するときに耳の上部を塗っているため、右耳について印象がどのように考えていたかは判然としがたい。
- 45) 「人間、木華開耶媛―私の創作した態度について」（『文芸時報』120 1929（昭和4）年11月）
- 46) 「芸術家は（中略）華嚴五十五所を行く魂の求道者、善財童子に近いものがあるのではないか。」（『美の跫音』あとがき 人文書院 1945（昭和20）年発行、ただし印刷は1955（昭和30）年とある）なお、明恵の臨終の言葉「我、戒を護る中より来る」は、『華嚴経』中の弥勒菩薩が善財童子に語った言葉に依る。
- 47) 『画室随想』光琳社出版 1971（昭和46）年
- 48) 『鉄斎研究』第33号（1977（昭和52）年9月）

49) 紙本墨画、縦12.6×横7.0cm。頭布を被り左手に経巻、右手に杖を持ち、足駄を履く姿。